

発 表 タ イ ト ル	和歌山県友ヶ島におけるタイワンジカの遺伝学的解析
発 表 者 所 属 名	生命科学研究科遺伝学専攻（国立遺伝学研究所）
発 表 者 氏 名	松本 悠貴
タイワンジカ <i>Cervus nippon taiouanus</i> はニホンジカに近縁な台湾の固有亜種であるが、台湾では狩猟や生息地の破壊によって 1960 年代に野生絶滅した。その後、台湾の動物園などで飼育されていた個体が台湾南部にある墾丁国家公園に放獣され、現在も定期的に個体数などのモニタリングがなされている。 和歌山県の友ヶ島にはタイワンジカが放獣された記録が残っており、現在もその個体群が維持されている。この島のシカが本当にタイワンジカであれば、タイワンジカの保護に有用な個体群になると考えられる。しかし、国内の他の島にもタイワンジカが導入されたとされていたが、遺伝学的解析の結果、実際にはニホンジカであったことが報告されている。また、本個体群の一部の個体では、角の形状や毛色がタイワンジカの特徴を反映しておらず、実際にタイワンジカかどうか疑問視される状況であった。発表者らは友ヶ島の個体群がタイワンジカかどうかを明らかにするため、複数の遺伝子配列について解析を行った。 島内で自然死した 16 個体の組織片から DNA を抽出し、ミトコンドリアおよび核 DNA の一部の遺伝子配列を決定した。この研究では、タイワンジカの DNA 配列を調べる必要があったため、国立台湾大学の研究者に墾丁国家公園で放獣されたタイワンジカの DNA の解析を依頼し、共同で研究を進めた。友ヶ島のシカの遺伝子配列を、台湾で放獣された個体群、国内のニホンジカ個体群、および DNA データベースに登録されている配列と比較した。その結果、友ヶ島のシカ個体群はアカシカやサンバーといった他のシカ類とタイワンジカが交雑している個体群であることがわかった。また、文献調査から、本個体群は台湾の鹿牧場由来である可能性が高いことがわかった。 本研究は、外来種を対象に遺伝学的解析を行うことで、対象となる種やその起源を明らかにし、野生動物の保護に有用な知見を得ることができることを示した。また、タイワンジカは狩猟や生息地破壊のため野生絶滅したり、角の生産のために飼養されたり、外来種として放獣されるなど、様々な形で人間活動の影響を受けている。このため、本種の現状を社会に発信することで、外来種問題をはじめとした野生動物の保護に関わる諸問題の普及・啓発に貢献すると考えられる。	